

良く見ると、昔の鉱道で、水はそこからくるものだ。入口は人が入らないようにふさいである。水もにがくて飲めたものでなかった。

兩岸から木々がかぶさってきて、水も漸減した。水がなくなった所で引き返すことにする。(記・功)

(タイム)

出合八・三〇―登山道九・〇〇―折返し点九・一五―
板谷鉱山一〇・〇〇

赤泥沢 (仮称)

一九八〇年五月二十五日

雨

◆天気 (曇時々晴)

林道より砂防ダムに下り、ワラジをつける。少し進むと一五段の滝があり、左岸を捲く。このところにはウダが多数はえており、ザックにほぼいつぱいとった。

一〇時一〇分赤泥沢出合。二段の滝をかけて蟹ヶ沢に合流している。出合すぐ上で二俣になっており両方とも滝をかけている。水量の多い左沢に入る。一五段五段の滝となっている。ホールドが細く、バランスのよさが要



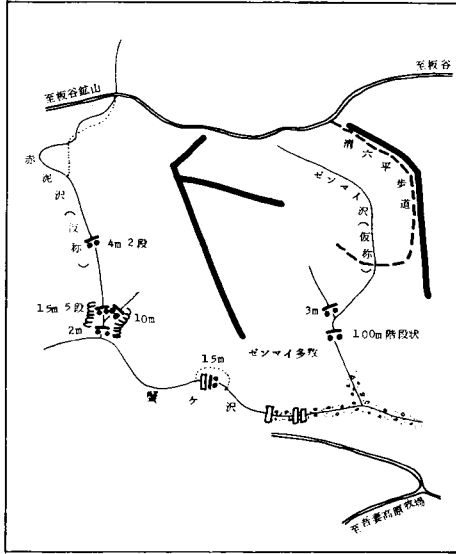
赤泥沢 (仮称) の廻行

求される。三段目と四段目ではトップが登ったあと後続者のためシュリンゲを出して通過した。

ゴーロ状がしばらく続く。F2は何なく通過。やがて鉄分の多い泥に川底がおおわれ、みな泥だらけになりながら林道に出た。(記・)

(タイム)

林道終点・砂防ダム八・四〇―赤泥沢出合一〇・一〇―
F2一〇・四〇―林道一一・五五



ゼンマイ沢，赤泥沢（作図： 5）

ゼンマイ沢

（仮称・下降）

一九八〇年五月二十五日

◆天気（曇時々晴）

清六平歩道を出合まで歩いて下り始める。しばらく下った所で、右岸から三ツ木の滝となって支流が入り、この下には一〇〇mの滝が階段状に続いていた。少し下ったが傾斜がきつくなり途中でワラジをはく。この後は滝も

なく蟹ヶ沢本流に着く。

この沢はゼンマイが多数生えていた。ゼンマイ沢と仮称することにする。

（タイム）

清六平歩道入口一・二二一五―ゼンマイ沢一・二二・三〇―

蟹ヶ沢本流一三・四〇

天戸川

一九八〇年七月十三日

◆天気（晴）

前日の雨のため沢はかなりの増水である。林道を徳沢との二俣まで歩き、身仕度を整え遡行を始める。

砂防ダムを二つ左岸を捲いて少し歩くとゴルジュになる。まず右岸をへつり、左岸に渡ってへつる。この時喜吉君が足をすべらせて水の中へ。このゴルジュのすぐ上にも砂防八段があった。左岸を捲く。

しばらく歩くと砂防ダムが二つ続いていて、左岸ぞいに石積みのできがあった。この先にもまた砂防ダムが二つ続く。下のダム五段は左岸側にはしごがあり、上のダム